

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2017年7月20日放送

「第68回日本皮膚科学会西部支部学術大会 ①

大会を終えて」

鳥取大学 皮膚科
教授 山元 修

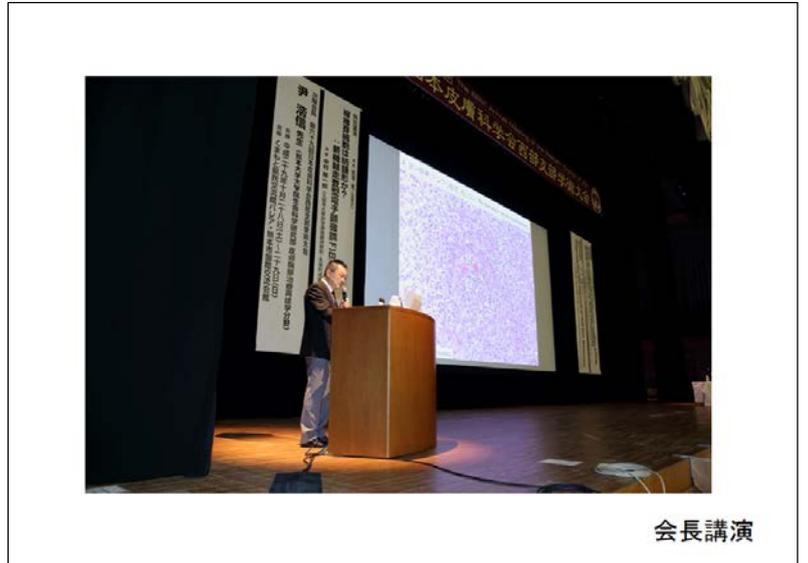
はじめに

皆さん、こんばんは、鳥取大学皮膚科の山元でございます。平成28年11月19日から20日にかけて、私ども鳥取大学皮膚科主催で、鳥取県米子市の米子コンベンションセンターにて、第68回日本皮膚科学会西部支部学術大会を開催させていただきました。米子市は山陰地方のほぼ中央に位置しますが、地理的条件と、山陰の天候が不順ということで、参加者は少ないと予想しておりましたが、幸い天候に恵まれ、全国各地より787名の参加者を得て、盛会のうちに会を終了しました。ご参加いただいた皆様をはじめ、講演やシンポジウムの講師陣、企画演題ならびに一般演題の演者、座長、西部支部運営委員や代議員、運営事務局、鳥取大学ならびに産業医科大学の皮膚科同門会、以上の皆様方のご協力に対し大会会長として厚く御礼申し上げます。



テーマ「かたちにこだわる」

本学術大会のテーマは「かたちにこだわる」でございました。“かたち”といえば、まずは皮膚科学の根幹をなす肉眼臨床、私が専門とする皮膚病理組織学などを連想されると思いますが、そのみならずシステムや様式、スタイルといった意味も込めました。形態学はもちろん、皮膚の免疫システム、治療の最新のかたち、代表的皮膚疾患の病態様式、在宅医療のあり方などに対しても、“かたち”という言葉で表せます。今回はこの“かたち”にとことんこだわって企画しました。



会長講演

形態学・病理学をメインとした内容

依頼講演は、形態学・病理関係をメインに据えました。

招待講演では、私のお師匠様である米国 Boston 大学の Jag Bhawan 教授に、「皮膚疾患の診断における臨床病理相関の役割」をテーマにお願いし、病理組織だけでは診断に迷う場合、臨床医との対話を通して臨床像と照らし合わせることの重要性が強調されました。

国際交流講演として韓国の Sungkyunkwan 大学の Dong-Youn Lee 教授に「爪部のメラノーマ」についてご講演いただきました。爪部メラノーマは臨床像や病理組織の把握が難しいため早期診断が難しいのですが、それをどう克服するかの話を提供していただきました。

特別講演では、久留米大学解剖学の中村圭一郎教授に、新機軸走査型電子顕微鏡である FIB/SEM について解説していただきました。走査電顕でありながら、透過電顕と同じ切片画像を観察できることにより得られる三次元超微構造は、圧巻の美しさと精密さを兼ね備えており、驚きの連続でした。

教育講演では、まず鳥取大学器官病理学の梅北善久教授に、皮膚科医にはなじみの薄



米国ボストン大学 Jag Bhawan 教授

い乳癌の病理について、また、産業医科大学第 1 病理学の久岡正典教授には、これまた皮膚科医には難解な、軟部肉腫の病理の最新の知見についてご講演を賜りました。

また、在宅がん診療のパイオニアとして有名な鳥取市の野の花診療所の徳永進先生には、在宅医療には様々な“かたち”がある、すなわち不定形であるということ、事例を交えながら教えていただきました。

シンポジウムは 2 つ設けました。まず、「アレルギー・免疫／最新のかたち」というセッションでは、5 名の研究者に皮膚の免疫・アレルギーと形態学の融合を中心にしたお話を賜りました。

京都大学の椛島健治教授には、二光子励起顕微鏡システムを用いた各種疾患モデルの生体イメージングをお示しいただき、免疫細胞の動態をリアルタイムで見せていただきました。

大阪大学生命機能研究科時空生物学講座細胞内膜動態研究室の吉森保教授には、昨年大隅教授のノーベル生理学賞受賞でも話題になったオートファジーの機能について、膨大な知見をもとに分かりやすく解説していただきました。

岡崎統合バイオサイエンスセンターの富永真琴教授は、皮膚の感覚神経終末での活動電位発生に関わるイオンチャネルのうち、温度感受性 TRP チャネルが皮膚のかゆみと痛みの刺激感知に関与することを示されました。

島根大学の森田栄伸教授は、乾癬角層から抗白癬菌ペプチドを分離し、それが psoriasin であり、その還元型に抗真菌作用があることをお話しされました。

慶應義塾大学の天谷雅行教授には、表皮のタイトジャンクションの恒常性について、Kelvin の扁平な 14 面体の概念を用いた“かたち”にこだわった解析を披露していただきました。

「皮膚病理／若手が語る最新のかたち」シンポジウムでは、日本の皮膚病理の将来を背負って立つ若手集団、「草志衆」から 5 名の先生が講演されました。

京都府立医科大学の浅井純先生には皮膚の肉芽腫の病理組織と発症機序について、兵庫県立がんセンターの高井利浩先生には一般にはなじみの薄い有棘細胞癌の病理像の亜型分類について、慶應義塾大学の種瀬啓氏先生には皮膚腫瘍におけるシグナル伝達経路の病態への関与について、また鳥取大学の柳原茂人先生には表皮真皮境界部病変における基底細胞の空胞変性の形態形成について、最後に日本医科大学の高山良子先生には、IgG4 関連疾患の皮膚病変の病理組織について、若々しさに溢れた講演をしていただきました。

さらに、特別企画として CPC ならびにダーモスコピーセッションの 2 本立ての「かたち競演会」というコーナーを設け、すべての西部支部所属大学にご参加いただきました。

オーガナイザーの先生には、とにかく楽しくかつ盛り上がるような企画をお願いしており、見事期待に答えていただきました。各演者には、他大学の症例の診断名をあらかじめ回答してもらった上で、採点して上位者を表彰するというイベントも設けました。演者の皆さんには似顔絵をプレゼントし、プログラムにもそれを掲載させていただきました。

一般演題は、西日本を中心に 139 の演題をいただきました。ポスターおよび口演の 2 本立てでしたが、ポスター会場を敢えて懇親会会場に直に隣接させ、懇親会の時にポスターの前で、食事をしながら討論が出来るようにいたしました。どれも各施設よりの選りすぐりの演題でしたが、その中でも特に優れた演者にはポスター賞を設けて表彰しました。

スポンサーセミナーですが、特に 1 日目のイブニングセミナーは、共催企業に「かたちにこだわる」という趣旨をご理解いただいた上で、講演の半分は私が指名させていただいた 8 名の先生に形態学を中心としたお話を賜りました。共催いただいた各企業の皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

昨年開催された第 79 回日本皮膚科学会東京支部・東部支部合同学術大会では、会長の坪井良治教授の発案で、参加者の便宜のため、演者の許可を得た上で各会場の発表を撮影して、学術大会後に e-learning として動画配信した、と聞いておりました。私どももそれを踏襲して、メイン会場、および「かたち競演会」や一部の教育講演が行われた B 会場での講演について事後配信いたしました。2 会場に限りましたが、参加者には大変役に立ったのではないかと思いますし、今後もこのような試みが浸透していくものと思われま

す。支部企画研修講習会は、会期中に開いて欲しい、というご要望にこたえ、初日の午前中に設けました。「皮膚病理道場 2016 in 米子」と銘打って、佐賀市の三砂範幸先生と埼玉医科大学国際医療センター病理診断科の新井栄一教授に、専門医に必須の病理の知識について、座学とチューター付きの実習という、従来の研修講習会にはなかった“かたち”で解説をしていただきました。土曜日の早い時間にもかかわらず、多数の若い皮膚科医が集まり、熱心に取り組んでいました。

おわりに

さて、本学術大会の成功の裏には、準備から当日の運営まですべて円滑にこなして下さった、日本皮膚科学会の総会・学術大会チームのスタッフの皆様のご活躍があったことも、忘れてはなりません。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

最後に、本学術大会では一貫して”かたち”にこだわったため、ある意味偏った内容

だったかも知れませんが、支部開催の学術大会でしかできない、会長の思い入れの詰まった企画があっても良いのでは、という考えがありました。参加者の皆様にも、本大会が、皮膚の様々な“かたち”について深く考えていただく機会になり、さらに本大会での知識の吸収が、明日からの診療・学術活動に少しでも役に立ったのであれば、これほど嬉しいことは御座いません。